

仮の居場所におけるケア環境と看護者のあり方
—ハワイ研修での学びからの一考察—

川島 美保, 橋本 和子

高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

Care Environment and Nurse's Ideal Way in Temporary "Ibashi"
A Consideration from Learning by Hawaii training

Miho KAWASHIMA, Kazuko HASHIMOTO

Department of Nursing, Kochi University
Kohasu ,Okochi ,Nankoku-city,Kochi (〒783-8505) ,Japan

Abstract

This report is consideration care environment in the child hospitals and nurse's ideal way from learning in the Hawaii training.

It is important that those who nurse offer the caring environment that the child and the family can spend as temporary "Ibashi", keep own mind and body's balance, and are related with the child and the family.

キーワード：居場所, ケア環境, 看護者, 癒し, ハワイ, 小児病院, 小児看護

Key Words: Ibashi, Care Environment, Nurse, Healing, Hawaii, Child Hospital, Child Health Nursing

はじめに

近年、病院は入院治療を受けるクライアントにとって、単に疾患を治癒させるための治療を受けるという‘受療’の場ではなく、日常生活を営む‘生活’の場であるという考え方は浸透している。しかし、さらに言うなれば単に‘生活’の場ではなく、クライアントが自分らしくいられる‘仮の居場所’¹⁾であるべきである。居場所ではなく‘仮の居場所’としたのは、病院はあくまでも病院であり、療養を必要とする時期に一時的に滞在するべきところであり、‘真の居場所’ではないからである。

では、‘仮の居場所’としての病院とはどうあるべきか？

今回、筆者らはハワイ州ホノルルにあるシュライナーズ小児病院とカピオラニ母子センターという2つの小児病院の見学とハワイ先住民の健康法について学ぶ機会を得た。本稿では、この2つの施設の特徴やハワイ先住民の健康法の根底に流れる「癒し」の概念に着目し、‘仮の居場所’としてのケア環境と看護者のあり方について検討したい。

I. 研修内容

1. シュライナーズ小児病院 (Shriners Hospitals for Children)

1) シュライナーズ小児病院の理念及び取り組み

シュライナーズ小児病院は 18 歳以下の子どもを対象とした整形外科専門病院であり、1922 年にシュリーヴポートに設立されたのを初めとして、現在では北アメリカを中心にカナダ、メキシコに合計 22 施設を有している。このシュライナーズ小児病院グループは、世界で最も大きな慈善団体として知られている。その理由が、シュライナーズ小児病院グループの最も大きな特徴であるのだが、シュライナーズ小児病院の運営は全て寄付金で賄われており、子どもは民族や宗教に関らず、当病院で受ける治療や手術やあらゆるサービスについて全て無料で受けられるのである。このシュライナーズの慈善行為はそれぞれのシュライナーズ病院に年 1 回配分される割当金と病院が行うイベントで調達した資金、多くの人々からの善意に満ちた寄付金や贈与によって賄われている。

また、シュライナーズ小児病院は毎年、専門的な研究や新たな治療法の開発に 100 万ドルを費やし、整形外科領域の治療、手術、研究において先駆的な取り組みをしており、整形外科領域における多くの国際的なリーダーとエキスパートを輩出している。この力を求めて、世界各国から子ども・家族が集まっている。これまでに、治療を受けた人数は 23,272 名 (2005 年 6 月 30 日現在) で、日本からも 23 名が訪れていた。

さらにリハビリテーションの専門でもあり、ファミリーセンターケアを取り入れていることが特徴である。ファミリーセンターケアは 1960 年頃から患者、家族と産科、小児科の専門職が家族を一単位として捉えることの必要性に気づき取り組み始めたもの²⁾であり、医療専門職と家族との間に尊敬、サポート、協働関係が必要とされている。シュライナーズ病院におけるファミリーセンターケアは、「子どもの回復には身体的治療を受けると同時にストレスも癒されることが重要である」という理念の下に取り組まれている。すなわち、子どもの治癒には家族の力が欠かせないものとし、入院中には子どものそばに家族がいられるように、なおかつ、子どもの癒しの存在である家族自身の健康を守るためにもゆっくりと休める環境を提供するべく、家族の宿泊施設も入院患児数と同じだけ (約 40 室) 用意されていた。

2) シュライナーズ小児病院の施設の特徴

(1) 外観

病院の敷地の入口には、シュライナーズ小児病院の石碑があり、一歩足を踏み入ると入口から病院の建物まで、広大な芝生と木々が太陽の光を浴びて暖かく迎え入れてくれた。病院は 1 階建てで圧迫感を感じさせず、ハワイの青空を遮ることなく敷地内に佇んでおり、病院というよりも別荘のような雰囲気を醸し出し、まるでバカンスにでも来たような穏やかな気持ちに



写真 1 シュライナーズ小児病院の入り口

させてくれた。この病院の門をくぐる者は少なからず、病気や治療、入院生活というこれから自分達の身に起こることに不安を覚え、緊張していることが予測される。しかし、こ

の光景はそれらの不安や緊張を和らげ、包み込むものであった。

(2) ロビー

病院の玄関を入ると、吹き抜けのロビーである。すぐ右手には事務所があり、左手には創立者のシュライナーズ氏の写真が飾られている。中央部には、診療棟への通路があり、その案内図が掲示されていた。そして、その通路の両側はハワイ独特の植物が植えられ、人為的に造られた滝が流れ、涼しさを演出していた。吹き抜けから差し込む太陽の光と風は心地よく、この場所が病院の中であるとは微塵も感じさせない。この光景をゆっくりと眺めることができるようにいくつかの椅子も置かれていた。初めてこの病院を訪れた人だけでなく、入院中の子どもや家族もこの場所が病院であることも忘れ、日光浴を楽しむことができるという印象を受けた。



写真2 ロビー 通路の右側



写真3 ロビー 通路の左側

(3) 外来

外来は、子ども達が日常的に慣れ親しんでいる風景に近づけるというコンセプトの下に造られていた。すなわち、この外来自体がハワイの海のイメージで造られていたのである。受付カウンターは船をイメージした形であり、待合は海と砂浜をイメージにしてブルーとベージュの2色のペインティングが施され、それぞれのスペースに置かれている椅子も海にあるものはブルー、砂浜にあるものはオレンジである。また、海岸沿いに植えられた椰子をイメージし、椰子の木のモニュメントも中央に配置されていた。



写真4 船の形をした外来受付



写真5 ハワイの海と砂浜をイメージした
外来の待合ロビー

(4) 放射線部

放射線部のレントゲン撮影室やそれぞれの部屋には、それぞれ子ども達が楽しめるように壁や天井に絵が描かれ、天井にモービルのようなものを吊るすなどの工夫がされていた。

一般的に、レントゲン撮影室やCTやMRI室等の検査室は機械が置かれていることでも、無機質な冷たい印象を与えやすい。このようなちょっとした工夫で、その遊び心を感じさせる空間となっていた。

(5) プレイルーム

子ども達がいつでも集うことができるプレイルームは、天井も非常に高く、広々とゆったりとした空間であった。ここには、天井から大きなモービルが吊るされ、バスケットゴールが置かれていた。また、子ども達がいろいろな遊びが創造的にできるように、画材道具や画用紙、粘土、ボール、エレクトーンなどの楽器等が備えられていた。見学したのが、ハロウィンを数日後に控えた時期であり、子ども達が作ったハロウィン用の飾りが飾られていた。ここには、プレイセラピストが駐在しており、プレイセラピーが行われていた。プレイセラピストは、子ども達が辛い治療や入院生活の中で、それらを忘れた夢中になれる遊びの時間を提供することや治療や検査について、子どもに分かりやすく説明する役割を担っていた。



写真6 レントゲン室の様子



写真7 プレイルームの様子



写真8 プレイルームの様子

このように、シュライナーズ小児病院では、優れた設備、快適な環境の中で、専門性の高いスタッフの力を得たり、他の子どもとの付き合いの中で、子どもは支えや励みを得て、闘病生活を送っているのである。

2. カピオラニ母子センター (Kapi'olani Medical Center for Women&Children)

1) カピオラニ母子センターの理念及び取り組み

カピオラニ母子センターは、1890年にカピオラニ王妃が母子のためにカピオラニ産院を設立したことに由来し、以後この地域での公的機関として発展を遂げてきたものであり、今日では、カピオラニ母子センター、カピオラニ医療センター、性虐待治療プログラムや思春期への介入プログラムの中にもその意志が受け継がれている。

特にカピオラニ母子センターは女性に関するあらゆる健康問題について包括的に対応するための施設であり、女性の健康問題専門のリーダー的役割を果たしている。同時に、子どもの専門的なケアも提供しており、ハワイにおける唯一の小児集中ケア病棟と思春期病棟を有し、毎年、20,000人以上の子どもが救急治療を受けている。そして、ハワイにおける唯一の妊産婦と小児専門の病院であり、高度なトレーニングを受けた医師、看護師が最

高の技術、ケアを母子に提供し、快適で美しい施設環境の中で喜ばしい出産を体験することができるようになっている。

2) カピオラニ母子センターの施設の特徴

(1) 外観

道路からすぐ傍に当センターは建てられていた。建物の造りは、一般的な病院施設とほぼ変わらないものであるが、5年前に改築された建物はまだまだきれいであり、薄いピンクベージュの塗装が優しい雰囲気を漂わせていた。

(2) ロビー

ロビーには、カピオラニ王妃とその夫の写真が大きな額に入れられ飾られていた。床は大理石でできており、アンティーク調のソファが置かれ、高級ホテルのロビーのような様相であった。



写真9 カピオラニ母子センターの外観



写真10 ロビー

(3) 病棟

病棟の壁は、青い空や海をイメージしたペインティングが施され、日本の多くの病院の殺風景な雰囲気とは違って、非常に明るい雰囲気であった。部屋は全て個室で、それぞれの部屋にはネームプレートはなく、完全にプライバシーを保護されたものであった。その代わりに、部屋には“FLYING FISH MALOLO”といったルームプレート付けられており、全ての個室が識別できるようになっているのが特徴である。また、そのプレートで、絶飲食、IN・OUTチェック、流動食、隔離という看護上の指示が一目で分かるように工夫されていた。



写真11 病棟の様子

(4) 病室

病室には、付き添い者用のソファと簡易ベッドが備え付けられており、家族は適宜休息をとれるようになっている。

また、LDRでは、頭元には木目調の棚が備え付けられており、その棚の引き戸を開けると吸引や酸素がいつでも使用できるように準備されていた。インフュージョンポンプ等のその他の機器類は足元にアコーディオンカーテンで仕切られた空間に収納されており、必要時以外は目に触れることのないように工夫されていた。また、ベッドも木目調の造りをしていながらも、出産時には、足元が下がり分娩台として使用できるものであった。

(5) スタッフ

スタッフは看護師も看護助手も白衣を着ておらず、色々な柄のついたシャツとパンツスタイルを自由に着こなしており、医療者という雰囲気ではなく、子どもの家族がケアをしているかのような印象を受けた。



写真12 ネームプレート

3. ハワイ先住民の健康観と治療法

1) バランスを重視するハワイ先住民の健康観

ハワイ先住民には、独自の健康に対する考え方が受け継がれている。それは、バランスを重視していることである。例えば、ストレスについては、①ストレスを精神、身体、魂を含んだ個人の全体のものとして捉える、②ストレスは個人とコミュニティとの間に生じる、③ストレスは個人と自然と自然を超越した全てのものとつながっている、として考えられており、ストレスを“バランスが保てていない状況”として捉えているのである。したがって、病気の原因は、①自分の心が保てていなかったり、コミュニティとの調和を保てていないとき、②規律を破ったとき、③呪いをかけられたとき、だとされており、ここでも自分自身や他者、コミュニティとのバランスの崩れが原因として考えられていた。

2) ハワイ先住民の治療法

病気になった場合の治療法は、ハワイ先住民の治療法は大きく、心理社会的な方法、自然科学的方法、薬学的方法の3つに分かれている。

(1) 心理社会的な方法

ハワイ語で『Ho ‘oponopono』と呼ばれる心理社会的な方法である。これは最も重要な考え方であり、全ての病気は自分の中のバランスや他者とのバランスが崩れることが原因であるとの考えが根本となっている。

したがって、仮に感冒症状があっても受診しても、まずはその症状ではなく、自分自身のことや家族関係、友人関係について尋ねられ、もしこれらに問題がないと判断された場合には、感冒症状の詳細について尋ねられるのである。

(2) 自然科学的方法

主要な方法は、『lomilomi』と呼ばれるマッサージによって、身体的バランスと精神的バランスを整えてもらうことである。したがって、施術者が身体と精神のバランスがよい場合には、施術される側のバランスも整えられるが、逆に施術者の身体と精神のバランスが

悪い場合には、施術される側のバランスも悪くなるとされている。

(3) 薬学的方法

最も一般的な呼び方は『laau lapa au』であり、状態に応じて種々の植物やハーブを用いるものである。調合内容や分量はその調合する者によって微妙に変化するものであり、そのレシピは語り継がれるものである。

このように、3つの治療法が存在するが、それぞれの方法を実施する上で最も重視されていることは、施術者自身が技術だけではなく、人格や精神が安定し、自分自身のバランスを整えられていることであった。

II. 考察

1. 仮の居場所というケア環境の捉え方

日本の小児医療は世界最高レベルにあるものの、少子高齢化の進展による小児医療の不採算に伴う小児病床縮小や小児病棟の閉鎖が相次いで行われ、成人との混合病棟も増加している。健やか親子 21 (厚生労働省, 2001)⁴⁾では、21世紀に取り組むべき主要な課題の一つとして、「小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備」が挙げられ、小児の入院環境・在宅環境について「小児の入院については、成長・発達途上にある小児の特性を踏まえた生活環境の整備を行う必要がある。また、入院する患児の心のケアのための対策や、患児の家族の支援体制の整備を推進する必要がある。さらに、子どもが病気になった時に、子どもを家庭や医療機関等で看病できるよう、親が周囲に気兼ねなく休めるような社会環境を実現していく必要がある」としている。また、文部科学省は子どもが安全・安心して活動できる居場所づくりが必要であると3ヵ年計画に取り組んでいる⁵⁾。筆者らは、これらの2つの理念を元に看護者として、子どもの成長発達には健康状態や入院・在宅を問わずに子どもの居場所を保つケアが必要であると考えている。先行研究で入院中の子どもにとっての居場所とはやはり家や学校ではあるが、一時的だとしても病院の中で生活をせざるを得ないために、『真の「居場所」ではない病院の中で、子どもが自分自身の力や家族・仲間の力を借りながら、入院中の生活が居心地よいものとなるように取り組む』仮の居場所づくりをしていることが明らかになっている⁶⁾。これにより、入院中の子ども・家族にとっての病院環境とは‘仮の居場所’であるべきだと考えるのである。すなわち、仮の居場所とは『真の「居場所」ではない病院の中で、存在が脅かされることなく、安心でき、社会とつながりのある居心地のよい場所』と考えることができる。

2. 仮の居場所としてのケア環境に必要なもの

ハワイの2つの病院には、居心地のよさを感じさせる工夫が随所に見られた。一つは闘病生活の不安や恐怖を包み込み溶かしてしまうような環境である。例えば、圧迫感のない建物、水・光・緑といった自然を取り入れたデザイン、子どもの目線に合わせた効果的な絵画、季節感を感じられる空間、優しさ雰囲気のペイント、遊び心満載の病棟やプレイルーム、木目調の家具等を利用した家庭の部屋の雰囲気を感じさせる病室等である。二つ目は、子どもとともに家族の体調を気遣う配慮がされていることである。例えば、家族が子どもの入院に付き添うことができるように、そして、付き添うという心身ともに過酷な状

況の中で家族自身が身体を休めることができるようにと家族専用の宿泊施設が設けられていたり、病室内の付き添い用ベッドが日本でよく使用されているような簡易式のパイプベッドではなく、ソファベッドのようなものが備え付けられていたのである。このように2つの病院には、“癒し”という概念が脈々と流れてきたのである。

日本でも、美術大学との協同によりヒーリングアートを取り入れたり⁶⁾、子どもに大人気のアンパンマンなどのキャラクターを外来処置室、プレイルーム等の壁面アートに取り入れている病院もある。このような、子どもの興味・関心を引いたり、和ませるのに、効果的だと考える。さらには、子どもが緊張しやすいCT室、MR室、レントゲン室などでもこのような配慮を行っていくべきである。また、家族専用の宿泊施設についても、日本にもドナルド・マクドナルドハウスという“HOME AWAY FROM HOME”第2の我が家のようにくつろげる家をコンセプトとした、プライバシーが守られるキッチン、リビング、ダイニング、プレイルームの備わった家族の宿泊施設もあるが、現在は東京、宮城、高知、大阪、栃木の5箇所に限られている⁷⁾。特定の地域の病院を利用する家族のみがこのような恩恵を受けるのではなく、あらゆる場所で恩恵を受けられるように整備しなければならない。小児科をもつ病院全てが宿泊施設を備えることは難しいと思われるが、付き添い用のベッドの見直しやくつろぎのスペースを用意するなどの改善は最低限必要である。子どもと家族は一単位である。子どもの闘病生活を支えるには家族の存在は必要不可欠である。その家族が付き添う環境の劣悪さにより、疲弊し、より心身を消耗することになっては、子どもの闘病意欲を支えることはできない。子ども自身がくつろげる環境であることと同じぐらい家族もくつろげる環境を提供してこそケア環境を整えたことになるのである。この2つが備わって初めて仮の居場所としてのケア環境を創り出すことができると言えるであろう。

3. 子どもの仮の居場所にいる看護者にとって必要な要件

ハワイ先住民の大切にしていることは、“バランス”であった。それは、自分の中の、身・心・魂のバランスや、自分と他者とのバランス、自分とコミュニティのバランス、自分と自然とのバランス全てに渡り、重要であると認識されていた。

筆者らは、このハワイ先住民の考え方は看護者の姿勢として核となる重要なものであると認識している。子どもや家族に配慮した看護を提供するためには、看護者自身がバランスを保つ必要がある。すなわち、自分自身の身体が健康な状態でなければ、ケアすることはできない。また、闘病している子どもや家族の心を支えるためには、看護者自身の心が強くなければならない。また、子どもや家族の希望に添い、魂の底から子どもの回復を願い続けることが必要である。看護者が子どもや家族の支援者として看護を提供するために、ベッドサイドに立つ際には、常に自分自身の“バランス”を整えた最高のコンディションでなければならない。また、自分の“バランス”を整えるだけではなく、子どもと家族が主体的に療養生活を送れるように、過剰なケアを提供するのではなく、足りないところを補うあるいは、今ある力を強化するケアを提供することが必要であるが、この際にも、子どもと自分とのバランス、家族と自分とのバランスを考慮しつつ関わるのが前提であろう。また、よりよいケアを提供するには、自分自身だけではなく他の看護者あるいは他の専門職との協働も不可欠であるが、その際にも、それぞれが持つ力を最大限に発揮できる

ように“バランス”を考えながら取り組むことも重要である。

このように、自分自身の中でや他者との関係の中で、“バランス”を保ち、自分の看護力をマネジメントできることが看護者として必要な要件である。

おわりに

本稿は、2005年10月のハワイ研修で得た学びを元に、病院を仮の居場所として捉えた上で子どもと家族が癒され、くつろげるためのケア環境や看護者のあり方について考察した。小児病棟の閉鎖や成人との混合化が進むことは、子どもの療養生活にとって望ましいことではないが、このような現状の中では、ハード面の整備はより難しいと思われる。したがって、看護者自身がいかに子どもと家族にとって居心地よいケア環境を提供しようと意識しながら、日々関わるかが重要である。

謝辞

今回のハワイ研修にて、ご多忙の中ご指導下さいましたハワイ大学の John Casken 教授、Ann R.sloat 学科長他、諸先生方に心よりお礼申し上げます。

<引用・参考文献>

- 1) 川島 美保：慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもの居場所，平成 15 年度 高知女子大学大学院修士論文，2004.
- 2) Chiou CJ,Wang HH：Reflection on the essence of family-centered care，Hu Li Za Zhi,51(3),53-58,2004
- 3) 厚生労働省：健やか親子 21 検討会報告書，2000.
- 4) 文部科学省：子どもの居場所づくり新プラン，2004.
- 5) 川島 美保：慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもの仮の居場所づくり，高知大学学術研究報告 医学・看護学編，53，29-40，2004.
- 6) 佐藤奈々子，黒木文子，醍醐智絵他：子どもに配慮したケア環境を創り出す新しい取り組み，小児看護，28（6），747-751，2005.
- 7) 財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン：
<http://www.dmhcj.or.jp/>，(2006.9.20 確認)